

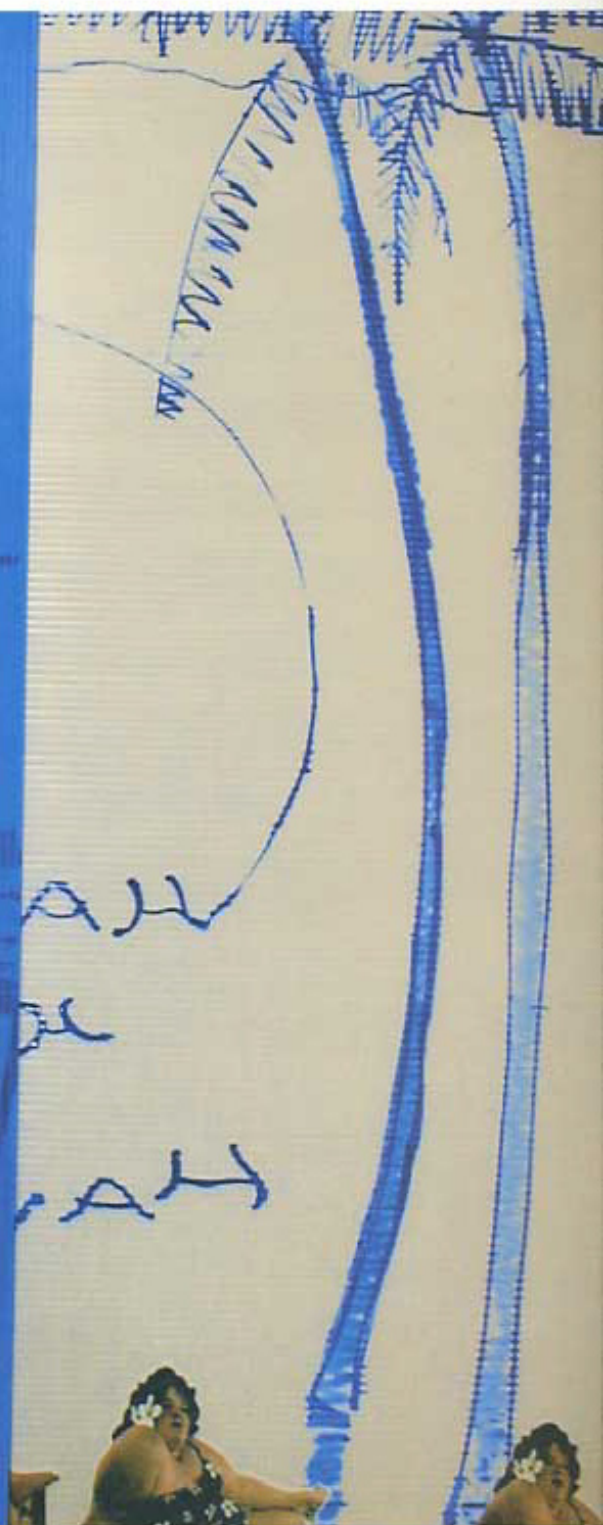
# 六花

俳句雑誌

りっか

2

*designed by Tomoko Tanaka*



訪  
戴



山田六甲

冬蜂の目をつぶらずに柞山  
香聞いて年の早瀬を渡るなり  
意外なるところに蕾ポイシセチア  
煙突を踏みはづしたかクリスマス  
天国を行つたり来たりクリスマス  
歳末のアロマセラピー治療かな  
我身にて我身にあらず年つまる

雪雲の上は晴れなり大晦日  
捨て迷ふ一冊もなく年送る  
煤逃げの男と女昼の星  
本日は曇りのち晴れ出初め式  
背中から近づいて行く初湯かな  
貧しくも青年笑顔冬の虹  
冬の虹潜りしことも不確かに  
壽と一字の賀状もらひけり  
名前なき賀状を深夜までにらむ

金婚式

松 山 律 子

二月にはこうするとして顔洗う  
福は内 ひと月たつのは早過ぎる  
妻が居て二月はわしらの記念の日  
芝枯れて生きることにも強弱が  
疲れたと言うな野茨の芽が赤い

柿

二 瓶 洋 子

火口まで裏磐梯の薄紅葉  
参道に沿ふ家毎の柿たわわ  
黄葉して金のからまつ林かな  
画家の眼で熟れし石榴を見上げぬ  
地に触れんばかりに柿のたわわなる

萩

梶浦玲良子

かくれんぼ蜻蛉の国の捕虜となる  
台風の向きがくるりと脇本陣  
墨を磨る夜更や萩のゆるる音  
掃苔の水汲みにゆく母の川  
夜長し雲形定規深呼吸

紅葉山

小田元

地震用意まるで明日は紅葉狩  
ゆく程に空気の軽き紅葉谷  
杣人の腰に鈴鳴る紅葉山  
仮り橋の脚がたがたと紅葉谷  
山鳥の尻尾の彩も紅葉山

雀の旗日

中 村 房 枝

寒鯉の尾のつくりたる濁りかな  
いちにちがこれほど大事梅の花  
節分の明けて雀の旗日かな  
厄介な方へ歩む子春隣  
海老様とつぶやけば風すでに春

草虱

木 内 美 保 子

戻り来る猫にびつしり草虱  
叩かれて首曲げる釘秋さびし  
柿熟れて梢に鳥語はづみをり  
手洗ひの紅葉の影を掬ひけり  
稲架解いて峡の一つ家丸見えに

コスモス

鳴 海 清 美

コスモスの花粉 右肩 左肩  
風 甘し 植物園の 秋の 暮  
鳩 一羽 二羽と 寄り来て 秋の 浜  
飛 び 石に 歩幅の 乱れ 天高し  
旅 慣れの 視野に 余れる 芒かな

# 背中より眠くなりたる蕪汁

林 裕美子

冬の星ざわめきのふと遠ざかる

被害妄想の人越して来て帰り花

外も好きおうちも好きよおでん煮る

重ね着の自由自在に娘たち

冬の冷え切った体が蕪汁によって温まり、満腹感も手伝って眠くなるのだが、このような眠気がくるとは知らなかった。作者が女性とわかっていいるからか、とても艶冶な感じが伝わってくるのではないか。背中というのはなんだか無防備ということへの連想を誘うのだ。



同人作品

# 橙木集



会 員 佐原 正子

鶴の湯百景どれも天高し  
磨かれし廊下湯宿の女郎花  
秋すだれにかこはれつつの露天風呂  
湯豆腐を掬ひとりたる蓮華かな  
通販の頁めくるや秋衣

小六月 笹村 政子

よそみ 信崎 和葉

鳩居堂序でに寄るも小六月  
小春日やともづなを解く女の手  
石光山石山寺の冬もみじ  
冬めくや源氏の間てふ小暗さに  
紅葉散りしきて山門不幸なり

雁の列よそみをしてる一羽かな  
崩れしは何時八重の山茶花地を匿す  
自転車の籠にはみ出すポインセチア  
午後四時をゆらしてゐたり櫛紅葉  
もみぢ葉の波紋を立てず散りにけり

菜根譚

六甲



鳩居堂序でに寄るも小六月

笹村 政子

小六月とは旧暦十月、小春と同じ。鳩居堂とは香、書画用品の販売店舗で関西では京都市中京区寺町姉小路上ル下本能寺前町と東京では銀座が有名。小春日和に誘われて鳩居堂をのぞいた。序でにだから、目的ではない。目的はほかにあったのだ。その目的も果たして気分之余裕ができたからにちがいない。

湯豆腐を掬ひとりたる蓮華かな

佐原 正子

蓮華は散蓮華のことで散った蓮華の花弁に似た形の陶製（最近プラスチックもある）の匙。文字通り蓮華で豆腐を掬い取ったのだが、なんだか豆腐が蓮華によって救われたように聞こえる効果があるものが面白い。

雁の列よそみをしてる一羽かな

信崎 和葉

この句、作者が永田耕衣の「天心にして脇見せり春の雁」を知っているのか知らないで作ったのか本人に確かめていないが、多分後者ではないかと推察する。知らなくて作ったのであれば、彼女は永田に匹敵する俳句眼を持っているということである。その点は自信を持った方が良い。だが、作品的には永田が先に発表しているから、この句は引つ込めた方がよいだろう。いずれ永田以上の作品を物にする資質は充分であるという証左だ。類句をおそれるなかれ。

冬夕焼あかずの間にも夜と昼

武田 美雪

この句のあかずの間の間が本当に開かずの間で長いこと開けることのない部屋なのか、開けることを禁じられている部屋なのか。読者が勝手に解釈するしかないのだが、あえて推察すれば、前の句「くさめくさめ母との距離をとる娘」があるから、受験生もしくは多感な時期の子供の部屋であろうか。親はとかく遠慮して侵入できないけれど、気持ちだけは部屋の中に入っているのである。

代々の知恵代々の縄を縛ふ

田中 武彦

縄をなうのは現代ではあまり見られなくなった作業

だ。昔はこの農家でも冬場、農耕作業が比較的少ない冬場に縄を縋っていた。だから冬の季語。その縄一本の縋い方にも代々の知恵と工夫の積み重ねによると作者は見た。もしかしたらその家によって他家とは違う工夫があったのかも知れぬ。

紫の蚯蚓樹雨の古道行く

中野 哲子

樹雨とは「きさめ」「きあめ」とよみ濃霧の時森林の中で霧の微かな水滴が枝葉について、やがて大粒の水滴となって雨のように落下する現象だ。そのような古道を歩いていたら大きな紫色をしたミミズが古道のまん中にうごめいていたに違いない。古道は昼間でも薄暗いところなのに一層ミミズの出現で怖さが倍増。

台風に寄り切られたる古木かな

西塚 成代

台風によって倒された古木をみて作者は「寄り切られた」というところまで思考が及んだ。いや洞察したのかも知れぬが、実に巧みな表現を發明したものだ。倒れた古木でありながら悲壮感や不幸感が漂っていないのは言葉の斡旋によること大だ。

秋晴れの空をまんべんなくみがく

馬場美智子

秋の爽やかな青天を簡潔に表現した。なるほどよく

磨かれた鏡のように一点の曇りもないことをこのように言えるのかと感心する。「まんべんなく」も日本晴れということも簡潔に鮮明に言えている。誰が磨いたかは神のみぞ知る。

扇置く友と旅行の打ち合わせ

松下 幸恵

旅行の打ち合わせが肝心な所に来た。ここまで来たら暑さよりも心は旅に飛んでいってしまつて、現実の世界から離れた状態。芝居がかつて言うならば「持った扇をぼとりと落とし」という場面か。その場面がはつきりと見えているのがよい。

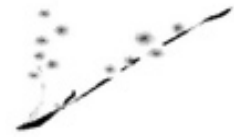
秋刀魚焼く弱音吐きたる換気扇

松本文一郎

換気扇を擬人化した句。人間にたとえて、サンマを焼く煙があまりにも多く、煙たいので換気扇が弱音を吐いているように思えたというのだ。理屈の句ではあるけれど、そのユーモアのある言葉選びに点を入れようと思う。

会員作品

# 六花集



林 裕美子

冬の星ざわめきのふと遠ざかる  
背中より眠くなりたる蕪汁  
被害妄想の人越して来て帰り花  
外も好きおうちも好きよおでん煮る  
重ね着の自由自在に娘たち

近藤 貞子

肩揺する癖出始めて二日かな  
初比叡タイヤの跡の旅の果  
松竹梅飾る手姿年とりぬ  
穂俵や流人の島の違ひ棚  
雑草の中にありけり仏の座

小林 山狸

菊の武者我を二つに切り裂けり  
時空間歪めをりしか紅い月  
霧深しのつぺらぼうとすれ違ひ  
冬荒れて生命いのち育む海なりし  
時雨止み妻の気に入る句を作る